

パリのセーヌ河岸 世界遺産「グラン・パレ」と日本の近代美術の関係について

大寒のみぎり、皆様方におかれましては、いかがお過ごしでしょうか。お正月は楽しく過ごせましたでしょうか。私は、せっかくの正月休み、どこか未踏の世界遺産でも見に行こうかと思ったのですが、長期の休みが取れず、毎年恒例の親戚への挨拶周りで終わってしまいました。たまには旅先でのんびりと、お正月を過ごしたいものです。できれば海外で……。

私は、何年か前にお正月をパリで過ごしたことがあります。冬のパリは、東京よりも寒く感じましたが、冬のパリ、特にクリスマス・シーズンのパリは、良いですよ。イルミネーションは日本より少しおとなしい感じがしますが、それが逆に厳かに思えて、私は好きですね。街灯の仄かな明かりもたまりません。また、日本はクリスマスを過ぎると、その余韻にひたる間もなく、街の装いがすぐにお正月となってしまいます。ところが、ヨーロッパでは、年が明けてもクリスマスの雰囲気漂っていて、これもまたうれしい限りです。

さて、今回は、その『パリのセーヌ河岸』の構成資産のひとつ、「グラン・パレ」について考察したいと思います。美術という面で見ると、どうしても「ルーブル美術館」や「オルセー美術館」に目が行ってしまいますが、実は「グラン・パレ」も、フランスと日本の近代美術との関係を語る上で見逃してはならないものだと、私は考えています。



「グラン・パレ」の全景

まず、グラン・パレを簡単にご紹介しますと、1900年に開催されたパリ万国博覧会のメイン会場として建設され、1964年に改装後、一部が国立美術館（グランパレ国立ギャラリー）となりました。グラン・パレ国立ギャラリーでは、過去にギュスターヴ・クールベやクロード・モネなどの企画展を開催したこともあります。また、グラン・パレは全体で長さ240mと、とても広く、この国立ギャラリー以外にも中央部のスペースで、様々な展示会や展覧会が開催されています。その代表例として、毎年（秋か春に）開催される、300年以上続くパリの由緒ある展覧会「ル・サロン展」は、よく知られています。

ル・サロン展については、フランス美術に関心のある方でしたら、耳にしたことがあるかもしれません。美術系特集のテレビ番組で、「印象派の画家たちがサロン入選した……」、「落選に泣いた……」、「フランス美術の権威サロン……」などと聞くことがありますね、実はこれ、この「ル・サロン展」のことを指します。

ここでちょっと、ル・サロン展の歴史にふれてみたいと思います。1648年に王立絵画・彫刻アカデミー（現フランス学士院）が誕生し、1667年にパレ・ロワイヤルにて王立絵画・彫刻アカデミー主催の第1回「官展」サロン展が開催されました。当時、サロンに入選すれば一流の画家と称され、落選した画家は見向きもされず、その当落の差はたいへんなものでした。日本人に馴染みのある画家としては、ダヴィッド、シャルダン、ドラクロワ、クールベ、ミレー、ピサロ、マネ、モネ、ルノワールなどが入選しています。「官展」サロン展は長い歴史の中で何度か名称や主催者が変わり、現在は「ル・サロン展」として継承され、フランス美術界を牽引し続けています。

実は、このル・サロン展（当時の官展サロン展）が、日本の「日展」の設立と深く関わっているのです。その関係を少しお話ししますと、まず、1900年にパリ万国博覧会がグラン・パレを中心に開催され、日本からも多数の美術作品が展示されました。展示された世界各国の作品を見た当時の明治政府は、日本の美術行政や教育の遅れを目の当たりにし、日本にもフランスのような政府が主催する展覧会を作ろうと考えたことが文展（現在の日展）設立のきっかけとなりました。後に、日本美術院を結成した岡倉天心や東京美術学校で教鞭を取った黒田清輝らも賛同し、1907年の第1回文展（現在の日展）の開催に至ったのです。このグラン・パレとル・サロン展（当時の官展サロン）が日本の近代美術の歴史にも大きく関わっていることは、たいへん興味深いことだと思います。もしグラン・パレがなかったら、日展は誕生しなかったかもしれませんね。フランスで開催された展覧会が日本の美術行政や教育に多大な影響を与えたことは、意外と知られていません。余談ですが、このル・サロン展（当時の官展サロン）は日本から応募できます。ただし、入選率は3～5%程度と、たいへん狭き門です。

色々述べてきましたが、簡単にまとめますと、グラン・パレがパリ万国博覧会場になり、そこで開催された官展ル・サロン展を見た明治政府が、その影響を受け、帰国後、文展（現在の日展）を設立するに至った、という流れになります。

今回は、画家やその作品への着目ではなく、フランスと日本の近代美術との繋がりについて、紐解いてみました。パリ旅行でグラン・パレを訪れたことのある日本人観光客は、少ないと思います。しかし、中に入ってみると、さすが世界遺産！ 荘厳壮大ですよ。現地ならではの企画展が開催されることもあり、思いのほか、穴場です。ぜひ、立ち寄ってみてください。